

シンポジウムで
は小林、手塚、
角館の3氏が意
見を交わした



東京都大学建築学科同窓会「如学会」と同大建築学科は11月21～23日の3日間、卒業生100人の活動を紹介する「建築100人展2010」を東京都世田谷区

照明家の角館政英氏(ほんぼり光環境計画)の3人が「行為を誘発する光と建築」について意見を交わした。

同大建築学科棟で開いた。如学会会員約6000人のうち、意匠や構造、設備、家具、インテリア、絵画など幅広い分野で活躍している100人以上がパネルや模型、制作作品などを出展。学生が授業

人の行為を促す環境条件を見つけておこなっている小林氏は、カイドブックにあるようなパターン化した街歩きではなく、「何気なくある風景の中にストリーを発見していく。固定概念を疑って街

で取り組んだ模型なども展示された。11年2月2～12日には東京都中央区のタチカワ銀座スペース「Atte」で建築1000人展「銀座展」が初開催される。

パネルディスカッションでは、小林氏のほか、建築家の手塚貴晴氏(同大教授、手塚建築研究所)と

21日には公開シンポジウムが行われ、10年日本建築学会賞(論文)を受賞した小林茂雄准教授が「人の行為を軸とした建築環境の評価に関する研究」をテーマに講演。

照明家の角館政英氏(ほんぼり光環境計画)の3人が「行為を誘発する光と建築」について意見を交わした。

制作作品などを出展。学生が授業で取り組んだ模型なども展示された。11年2月2～12日には東京都中央区のタチカワ銀座スペース「Atte」で建築1000人展「銀座展」が初開催される。

小林氏のほか、建築家の手塚貴晴氏(同大教授、手塚建築研究所)と

東京都市大学



幅広い分野で活躍する100人以上が出展した＝11月、東京都市大で

建築1000人展とシンポ

小林准教授「ストリート・ウォッチングを通じた街づくり目指す」

性能の確保が防犯性を高めたり、景観を美しくしたりしている。光は人の行為、行動を誘発する要素だ」と、光によって住宅から街都市までを同系列で計画できると主張した。

人の行為の中心に建築を考えるという手塚氏は、「屋根の家」や「ふじよつちえん」「彫刻の森ネットの森」などを紹介。「決まったことをやるのではなく、やってはいけないことをすると楽しい。目的のある場所をつくる」とその目的だけしか行動、行為が起らないが、目的のない場所をつくる」と何か別のことが起きてくる。

それが何だか分からないけれど面白そうだ」と述べ、数値化できないことの大切さを訴えた。

小林氏も「予想しない行為が生まれる建築や街ができたら面白い。しかし実情はその逆の街が増えている。ルールを厳格化し、自由にかかを生み出しにくい方向に進んでいる」と指摘した。

今後の活動について角館氏は、「自分の街が好きになることが大事。その手掛かりにと、いろんなチャレンジをしている」とし、「もっとできる空間をつくりたい。そこをデザインして質を高めることに力を注いでいきたい」と述べた。

小林氏は、光が街の魅力や特徴を引き出すツールになると強調した上で、今後の研究について「多様性を生む環境や建築がどうすればできるのか」という計画論の研究と、使う側が自分の頭で考え、豊かな視点を持つような研究に取り組んでいきたい」と締めくくった。

無断転載禁止

著作権は日刊建設工業新聞に帰属します

転載承認済

東京都大学グループ
学校法人 **五島育英会**